

## 『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

### 平成22年度派遣報告書

——ボツワナ・ボツワナ大学, スワヒリ語, 派遣期間(H22. 12. 19-H23. 3. 19)——

平成22年入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程2回生

原 宏輔

#### 自身の研究テーマについて

私の研究テーマは、ITP派遣申請時は、スワヒリ語映画VCDの流通について、であったが、ボツワナに派遣され、かの地の多様な自然環境や植生に触れ、従来からの興味でもあった「アフリカの自然環境」を研究したい、と思い立ち、アフリカ山岳氷河の調査へと変更になった。アフリカ内の氷河後退と周辺地域の気候変動との関係、また、アフリカ東部山岳地帯の古気候の復元と時系列に沿った変動の推移や大きさを、主に氷河上の生物群集や積雪、雪氷内に閉じ込められている生物由来の物質から分析する。アフリカの氷河の生態系調査はほとんど行われておらず、さらに、アフリカの氷河はその全てがあと10~15年の間に完全に消えてしまうと予測されており、今調査をしなければ、今後データが全く取れなくなる可能性が高い。

アフリカ内で山岳氷河が存在する地域は全部で三カ所あり、キリマンジャロ山系(タンザニア)、ケニア山山系(ケニア)、ルウェンゾリ山系(ウガンダ、コンゴ民主共和国)の三つだが、その全てがスワヒリ語圏に立地している。今回のスワヒリ語研修は、これらの地域での調査にスワヒリ語が使えることが有用だと思われたためである。文献調査よりも調査中のコミュニケーション(現地のガイドやポーター、研究者などとの)に使うことが主であると思われるので、特に会話練習に重点を置き、リスニング、スピーキングスキルを磨くことが目標である。

#### 研修言語の内容

スワヒリ語は、東アフリカ海岸地帯を中心に、タンザニア、ケニア、ウガンダ全域で公用語として使われ、コンゴ民主共和国などの一部でも話されている。話者数は7000万人以上(2007年)、バンツー諸語の中で最大の勢力を誇る言語。現在はタンザニア・ザンジバル地方の方言が標準語とされ、ラテン文字で記述される。アラブ商人との交易で商業用語として使われてきた歴史があるため、アラビア語からの借用語が多いのも特徴である。

#### 語学研修の内容

今回の語学研修は、言語学専攻のタンザニア人大学院生を教師として、英語で、一對一のプライベートレッスンで行われた。教師は、ダルエスサラーム大学で語学教師として英語およびスワヒリ語の教授経験を有している人物であった。授業は一日2時間、週に6~10時間のペースで進められた。また、それ以外の時間にも、ボツワナ大学内のスワヒリ語コミュニティー(タンザニア人、ケニア人などの学生)の集まりに混ぜてもらいスワヒリ語会話をを行い、会話のスキルを磨いた。

授業は主に4つのパートからなり、

- (1)文法事項
  - (2)ボキャブラリー構築
  - (3)会話練習
  - (4)リスニング練習
- であった。

(1)は、教材として教師自身が作成したプリントと英語で書かれたスワヒリ語学習のための教科書(既成品)が併用された。(2)は、毎回、スワヒリ語の新聞や書籍から20語知らない単語を抜き出し、意味を教えてもらう、という形で単語帳を作成していった。授業で扱った他の単語と合わせ、最終的に2000語前後の単語集が出来上がった。(3)は、教師と一対一で、学んだ文法事項を使っての一定時間のスワヒリ語会話練習を行った。(4)は、なるべく多くの人が発音するスワヒリ語を聞くという目的で、回によってネットラジオのスワヒリ語ニュースをきいたり、スワヒリ語の歌を聞いたり、教師の友人を教室に招いて3、4人でスワヒリ語の会話を行ったり、などが行われた。また、中間と最後にテストが行われた。



授業時の風景1



授業時の風景2



一服中・・・

### 研修期間中に印象に残った体験や経験

ボツワナ大学は教授陣も学生もボツワナ以外のアフリカ各地から来た外国人が多く、英語が中心言語だった。

町の商店や建設会社などは中国系が非常に多く、商業のパイをかなり奪ってしまったらしく、ボツワナ人にはとても印象が悪いようだった。私も中国人に間違われ、時には差別的ともとれる対応を受けることもあった。

ボツワナに住む人々は英語の堪能な人が多く、私自身の英語のトレーニングとしても、大変有用であった。ホームステイ先の中学生の娘さんなどは、セツワナ(ボツワナの国語)と英語がほぼ同じ話しさかもしくは英語の方が話しやすいと述べていた。彼女は公立の普通の中学校に通っていたので、都市部のボツワナ人の若年層に一般的な傾向なのかもしれない。ちなみにボツワナでは中学校以上の授業は基本的に英語で行われるそうである。ただ、セツワナの授業(国語の授業)はまた別にあるとのことだった。

### 目標の達成度や反省点について

日本国内である程度スワヒリ語の勉強をしてから行ったのだが、実際に授業をはじめて会話してみると相手の言っていることが全然聞き取れず、日本国内でできることには限界があると感じた。最終的には、ある程度会話できるようになり、目標はある程度達成されたと思われる。ただ、どうしてもスワヒリ語で話す相手が限られるので、より多くの人とスワヒリ語で話す経験を積みたいのならば、ケニア他スワヒリ語圏の国に留学した方がいいと思う。僕自身に限っていえば、同時に英語のスキルも磨きたかったので、英語の平均的なレベルが高いボツワナ大学に留学したことは正解だったと思っている。

反省点は、スワヒリ語の学習で手一杯で調査があまり行えなかったことである。セツワナをほとんど覚えられなかったことも反省点で、大学やハボロネ市内で暮らすぶんにはほぼ全ての人に英語が通じてしまうため実質的に不都合が生じなかったことが原因である。